

植物標本庫NACの概要と植物標本について

横井 力

本号から始めました、「シリーズ植物標本庫」では、当研究所飯綱庁舎にある植物標本庫に関係した話題を、不定期にお届けします。今回は当植物標本庫の概要と植物標本についてお話しさせていただきます。

当植物標本庫は、1996年度の研究所発足と同時に設立され、主に藤原陸夫コレクション約11万点、峯村まさコレクション約3万点がもととなり、本格的な運用が始まりました。2001年度には、国際植物分類学連合が管理する“Index Herbariorum”に国際略号NACとして登録され、国際的に認知される基盤ができています。県内では、信州大学理学部標本庫におけるさく葉標本の収蔵数約30万点につぐ約16万点約4,600種(高等植物)が収蔵され、中部地方有数の規模といえます(図1)。また、同標本庫には松田行雄コレクション(ミズゴケ類約16,000点42種2亜種)も収蔵されており、これは国内有数のミズゴケ類コレクションとなっています(図2)。現在までに、さく葉標本約14万点、ミズゴケ類標本全点がデータベース化されており、今後インターネットで公開をする予定です。

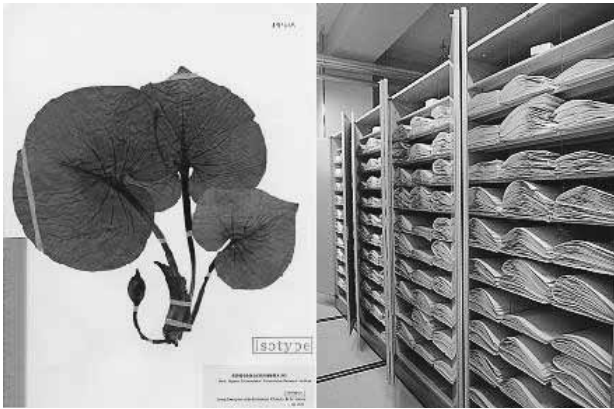


図1. さく葉標本(左)と収蔵用キャビネット(右)

さて、みなさんは「植物標本」がどのようなものか、ご覧になったことはあるでしょうか?ここでは植物標本で代表的なさく葉標本を例にして、その作成過程からお話しします。まず、野外で採集した植物を押し葉にして乾燥させます。次に、殺虫した押し葉と、植物の採集日・採集場所・採集者・植物名を記入したラベルを台紙に貼り付けます。ちなみに、このラベルがなければ、標本として価値がないと言われるほど、重要なものです。その後、台紙にID番号を押して標本庫に配架されたものが、閲覧可能なさく葉標本となります。

収蔵された標本は、温度・湿度を管理して大切に保管されれば、数百年単位で利用が可能です。しかし、年々増



図2. ミズゴケ類標本(左)と収蔵用キャビネット(右)

え続け、かさばる標本を、なぜ保管し続けなければならないのか、疑問に思う方がいるかもしれません。その答えの1つに、「標本は植物種の分布の証拠となる」ことがあげられます。例えば、ササユリの分布を知りたいとき、ある人がここでササユリを「見た」という情報は、それが本当にササユリであったか、他者の検証ができないため、分布の証拠として信頼性に欠けます。しかし標本があれば、他者の検証が可能となり、信頼性のある分布の証拠として利用価値があります。それゆえ、いつの年代の標本でも、大切に保管を続けるのです。また、長い年月をかけて集積された標本の情報を1つに集約することで、ササユリの分布が明らかにできます(図3)。



図3. 長野県内のササユリの分布(●は分布地点)(左)。分布図の作成には、多くのさく葉標本が利用される(右)。

当研究所では、植物標本の作製や、標本庫のお手伝いをさせていただくボランティアを随時募集しております。興味のある方は、本号1ページ上段にあるお問い合わせ先まで、お気軽にご連絡ください。